

東海創玄書道會

NO. 50

2014

東海創玄書道會



1 TOKYO 書 2014 公募団体の今

と き:平成 26 年 1 月 4 日(土)~16 日(木)
と ころ:東京都美術館

年が明けて 4 日東京の空はどこまでも青く透んでいます。

東京では、銀座和光とセントラル美術館の毎日新春展、上野松坂屋の朝日 20 人展、そして昨年からはまったこの「TOKYO 書展」でまるで書の花盛りと言えます。この「TOKYO 書展」は、東京都美術館が主催です。サブタイトルに(公募書団体の今)とあり、各団体から推薦された中堅、若手の作家は、10メートルもの壁面を与えられて力いっぱい作品を発表しています。各々の団体、作家の主義や主張が違いますから競い合いのような醍醐味で見応えがあります。

昨春の第 1 回展では本会の顧問の加藤裕先生が出品されましたが、2 回目の今春は本会代表の川合玄鳳先生が堂々の作品を発表されました。

開会のレセプションは真冬にもかかわらず熱気にあふれ、各会派の大幹部の先生方も顔をそろえていました。開会そして入場、それとともにゴングが鳴って、展示作品と観覧者との真剣勝負が始まったような不思議な空気となりました。

川合玄鳳先生の作品は、10メートルの壁面いっぱいの「楽山」！・・・展示室が古典派から現代派のコーナーに移り、超大作が多くならぶ中でも一際光彩を放っていました。10メートルの壁面にいっぱいの「楽山」は、豊かな力強さと純粋な明るさで表現されていました。後からの裏話では、出品作にいたるまでにいくつもの作品傾向や作風を試されておられたとのこと。われわれ東海創玄のみなさんも見習わないといけませんね！

創玄書道会から出品された先生は、他に蓮見光春先生、高野清玄先生、鈴木大有先生でいずれも創玄書道会を代表して出品されたにふさわしい素晴らしい作品でした。

2 東海創玄研修旅行 古都・京都の旅

と き:平成 25 年 9 月 29 日(日)

と ころ:京都



1号車の皆さん



詩仙堂 嘯月楼

高まりゆく空に秋の訪れを感じる中、古都・京都への研修旅行に参加し、石川丈山が造営、隠棲した「詩仙堂丈山寺」、一休禅師によって再興した「大覚寺」、そして「銀閣寺」を訪れました。

今回の研修旅行には、中部日本書道会理事であります、篆刻の榊原晴夫先生にもご参加頂き、出発にあたり、榊原先生より石川丈山、詩仙堂、一休禅師に関する大変貴重な資料をご用意頂き、拝読させていただきました。その故、旅が一層趣深いものになり、大変感謝しております。

ます。

三十年余り隠遁生活を送った丈山のことを思いながら、詩仙堂の庭を一步一步進むと、移り変わる庭の風景に心が洗われ、すがすがしい気持ちになりました。

昼食は「しょうざんリゾート京都」にて、紙屋川の溪涼床にて「京風膳」をいただきました。涼やかな風と川のせせらぎの中で、会員の皆様と和やかに親睦を深めました。



しょうざんリゾート京都で昼食

一九三〇	一七四四	一六三〇	一五〇〇	一三〇〇	一一三三	一〇一五	九三〇	八四七	八〇〇	行程
到着	名古屋駅西口	甲賀・土山	銀閣寺出発	銀閣寺	大徳寺	リゾート京都	昼食 しょうざん	詩仙堂	草津SA 休憩	甲賀・土山 休憩
解散		休憩								名古屋駅西口出発

大覚寺の枯山水庭園、簡素枯淡の美を映す銀閣寺も、心に残る京の思い出となりました。大覚寺大仙院和尚のお言葉「今日こそ出発点」と心して、日々を大切に研鑽に努めようと思っています。東海創玄の代表はじめ、お役を勤めて下さった先生方に感謝申し上げます。
(一号車 新山翠香)



2号車の皆さん



大仙院



銀閣寺

肌寒さを感じる朝。どんよりとした雲を眺め、お天気の回復を願っていました。祈りが通じ青空が顔を出し、日中は汗ばむほどになりました。

今回の研修旅行は、加藤裕先生のお声掛けで榊原晴夫先生に解説していただくことになりました。事前の資料も作成して頂き観光がより充実したものとなりました。

旅は詩仙堂→大徳寺→銀閣寺と順調に進みました。今回の見どころは何といっても「庭園」だと思います。大徳寺の枯山水はとても素晴らしく、和尚様の軽妙な語り口に引き込まれながらも、解説を聞き、造詣の一つ一つの意味について知りました。銀閣寺は人気もあり、沢山の人で賑わっていました。私が印象深かったのは、石川丈山が晩年を過ごした詩仙堂でた。入口の門も小さくひっそりとした佇まいで、静寂に包まれていました。榊原先生が問われた「なぜ丈山が三十数年この地ですごしたか」そして、「そこには丈山がもとめるすべてのものがある」のお言葉をとても興味深く思いました。実際に詩仙の間に座り、庭に出て、十境・十二景を一周してみますと、丈山ほどの有能な人物が己の名を挙げるこ

なく、自分自身で細部までこだわって造り上げた空間の中で、それを味わいながら過ごした地に立っている意味深さを感じました。その境地を理解することは難しいですが、同じ目線に立つことにより、少し近づけた気がします。

慌ただしい毎日の中日常の営みを丁寧に味わう心の余裕は、いつになったら持てるかわかりませんが、物事の捉え方や考え方について再考するきっかけになりました。

文末になりましたが、この旅行に尽力いただきました榊原先生、また、準備、運営の諸先生方にお礼申し上げます。

(二号車 内藤一翠)



第15回記念 清晨会書展

と き:平成 25 年 11 月 5 日(火)~10 日(日)

と ころ:名古屋市民ギャラリー栄

8 階 第 8・9 展示室

今回で第 15 回を数え、記念展として開催する運びとなりました。若干の額作品を含み、会員一同皆軸作品をベースとして制作を行い、更に吉田先生所蔵の金子鷗亭先生、金子卓義先生の作品と、今井魯川先生の作品が記念展の特別出品としてアクセントとなり、落ち着いた雰囲気

に包まれた会場になりました。また、本年の各種展覧会で活躍した本会会員から展覧会サイズの作品と、毎年評判の学生選抜の近代詩作品と数名の半切条幅作品も展示するなど、非常にバラエティに富んだ展示ができました。更に、本会最高齢の方の個展も併催することができました。期間中、お忙しい中ご来場賜りました方々に、会員一同心より厚くお礼申し上げます。

さて、この清晨会書展も 15 回展を持ちまして一旦終了となります。

今後は清晨会発足 25 周年、30 周年などに向けて充電し、新たな作品制作に取り組んでいく所存であります。ここまで導いていただいた諸先生方に感謝の意を表すとともに、新しい晨（あした）を作っていきたいと思えます。

最後に、日頃お世話になっております諸先生方におかれましては、引き続きご指導・ご鞭撻を賜りたく、何卒よろしくお願い申し上げます。

(記 鳥居 柳城)



後藤啓太氏 愛知県芸術文化選奨
文化新人賞ご受賞

この度、平成二十五年度、愛知県芸術文化選奨文化新人賞を賜りました。

海部俊樹名誉会長、樽本樹邨名誉副会長、安藤滴水名誉副会長をはじめ、多くの先生方、中部日本書道会を築かれた先人の先生方のおかげと、厚くお礼を申し上げます。

三月十二日、愛知県庁の講堂において授賞式が行われました。賞状の乗った黒塗りの盆を、職員の方が恭しく高く上げ、大村秀章知事の前に進み出る様子に、名誉な賞を頂戴したと緊張と感激で身の引き締まる思いがしました。

大学を卒業後、幼少からご指導いた

だいた故加藤大碩先生の内弟子として書の道に進むことを決意し、三十年が過ぎました。節目の年にこのような栄えある賞をいただき誠に嬉しく思います。

本年、中部日本書道会は創立八十周年を迎えます。鬼頭理事長が目標とされています「一致結束、全力、前向き」を胸に刻み、本会が更なる躍進を遂げるよう努力する所存です。

この賞を新たな出発点として、一層精進して参ります。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。（中部日本書道会「中日会報」より転載）



会員 News

東海創玄書道会役員

最高顧問	中野 北溟			
名誉会長	石飛 博光			
顧問	安藤 滴水	加藤 裕	黒田 玄夏	
	高木 光風	山中 秋邦		
参事	永井 恵子	服部 祥石	前田 小鶴	
代表	川合 玄鳳			
代表補佐	大島 緑水	川口 雄峰	武内 峰敏	
常任理事	後藤 啓太	鈴木 史鳳	高橋 栖雲	
	滝川 山翠	仁田脇 京華	廣澤 凌舟	
	吉村 和子			

第66回 毎日書道展（東海創玄関係分）

○会員賞選考委員・近代詩文書部当番審査員	安藤 滴水
○当番審査員（漢字部Ⅱ類）	鈴木 史鳳

創玄書道会役員

最高顧問	金子 聴松			
名誉会長	中野 北溟			
会長	大井 錦亭			
副会長	関口 春芳	内山 玲子	関 正人	
理事長	石飛 博光			
副理事長	永守 蒼穹	室井 玄聳		
	（以下東海創玄関係分）			
理事	加藤 裕			
監事	川合 玄鳳			
参与	黒田 玄夏			

中部日本書道会役員（東海創玄関係分）

名誉副会長	安藤 滴水			
常任顧問	黒田 玄夏			
顧問	山中 秋邦			
理事	加藤 裕	大島 緑水	武内 峰敏	
参与	服部 祥石			
第二事業部長	佐野 翠峰			
研究部長	廣澤 凌舟			
教育部長	後藤 啓太			

褒賞部長 武内 峰敏